

「宜野湾高校の生徒達へ (20)」

2020.6.15

「慰霊の日」が近づいてきた。沖縄戦を体験した人も減り、戦争の恐ろしさを実感する機会も少ない。

私は、昨年、知覧特攻平和会館 鹿児島島慰を訪れ、改めて平和の尊さを感じた。今回は、ある特攻隊員の遺書と知覧特攻平和会館を紹介する。

お父さん

お母さん

お元氣ですか。

今日私は特別攻撃隊員として出発致します。

「こ知覧は昨年八月より十一月まで所丈に二木一草みな懐かしく思われます。

隊員を命ぜられてから今日に至るまで無事任務を完遂できることを念じて居りました。

出撃の時は来ました。今は口管神明の加護を念じて居ります。

私が居なくなってもみんな元氣でお父さんは外でも働かになる。お母さんは内の仕事をやりになる。妹たちはすこやかに大きくなって幸福な家庭を持つ様になる。

そして、皆が明るく楽しく扶けあって美しい生活を営む。私はそれを希いそれを祈って居ります。

それに引換、私が子として「両親」何ら報ゆる処なくして征くことを非常に遺憾とします。

昨年の七月以降遂にお目にかかる機会はありませんでした。然しあの時夏の清々しい夕べ、明るい橙の下で皆様と楽しくお話した時の事はいつも忘れませんでした。

出撃前で時間が有りません。私の心は如何にしてもこの大業を完遂する事とみな様の御元氣であるを願う事です。

では「機嫌よう

やようない

昭次

皆様へ

六月六日



この知覧特攻平和会館は、太平洋戦争末期の沖縄戦において特攻という人類史上類のない作戦で、爆装した飛行機もとも敵艦に体当たり攻撃をした陸軍特別攻撃隊員の遺品や関係資料を展示しています。私たちは、特攻隊員や各地の戦場で戦死された多くの特攻隊員の遺徳を静かに回顧しながら、再び戦闘機に爆弾を装着し敵の艦船に体当たりをするという命の尊さ・尊厳を無視した戦法は絶対とってはならない、また、このような悲劇を生み出す戦争も起こしてはならないという情念で、貴重な遺品や資料を遺族の方々のご理解・協力と、関係者の方々の尽力によって展示しています。

特攻隊員達が二度と帰ることのない「必死」の出撃に臨んで念じたことは、再びこの国に平和と繁栄が甦ることであつたらうと思ひます。この地が出撃基地であつたことから、特攻戦死された隊員の当時の真の姿、遺品、記録を後世に残し、恒久の平和を祈念することが基地住民の責務であらうと信じて、ここに知覧特攻平和会館を建設した次第であります。

(知覧特攻平和会館HP)



沖縄戦を体験した沖縄だからこそ、この国の平和を守るためにできることがあるはずだ。